

自然観察会への参加動機とその背景

戸田 耿介
工 義尚

兵庫県教育委員会
兵庫県立播磨南高等学校

The Background and Motivation for Participating in the Society for the Appreciation of Nature

Kousuke Toda (Hyogo Prefectural Board of Education)

Yoshihisa Takumi (Hyogo Prefectural Harima Minami Highschool)

キーワード：自然遊び体験，自然観察会，環境保全意識，自然体験の効果

1. はじめに

環境教育の実践分野での自然観察会活動の担う役割は重要と考えられる(小川, 1978)。特に自然に関心を持つ市民層の裾野を拡げるといふ意図から、主に子どもを対象とした自然観察会が全国各地で開かれている(日本自然保護協会, 1986)。また、親たちの多くは子どもの健全な発育のため、自然との触れ合いを望んでいる(沼田, 1987)。

このような動きの中で、会員制により定期的に開催されている自然観察団体に子どもを参加させている保護者が、どのような動機で入会させたのか。またそのような保護者は、環境保全意識や生い立ちに関して、非会員の保護者と異なる点があるのか等を、アンケートにより調査してみた。

自然観察会が環境保全や自然保護意識の醸成に果たして有効であり得ているかを確認する研究の第一歩として報告したい。

調査した団体は、兵庫県神戸市を中心に阪神間～姫路の範囲で、小中学生を対象に約19年間にわたり組織的に自然観察会を継続している「兵庫県自然教室」(以下「自然教室」と略す)である。「自然教室」は、毎月1回7地区(合計84回)で行なわれる主に野外での観察会と、春および夏休みの長期宿泊自然教室を実施している。これらの活動は筆者らを含め、ボランティアの学生・社会人が運営している。プログラムは、水辺や里山で

*1991年8月15日受理

の四季それぞれの動植物の観察・自然遊び・探検ごっこ等が主なものである。

II. 調査の概要

1. 調査方法

調査は「自然教室」の現会員の保護者および神戸市内の小学校の4クラス分の保護者を対象とし、質問紙調査によって実施した。すなわち、会員の保護者に対しては、あらかじめ印刷した質問紙と回答欄を印刷した官製葉書を全家庭に郵送し、記入返送を求めた。一方対照群とした小学校の保護者にはクラス担任から児童を通して質問紙を家庭に持ち帰らせ、その用紙に直接記入の上回収を依頼した。期間は1991年3月上旬～4月中旬であった。

2. 調査項目

資料1.参照

3. 調査対象

「自然教室」の会員については、全家庭231戸に質問紙を送付し、保護者のうち「自然教室」への入会に積極的であった方の親に回答を依頼し、約7割の回収率であった。そのうち女性が92.5%であり、年令では30代62.1%、40代が37.3%であった。回答の際、複数の子どもの会員の場合、出席回数最も多い子どもについて該当する回答を選んでもらうようにした。「自然教室」の会員はほとんどが兵庫県南部の都市部に居住している。

一方対照群では、神戸市立妙法寺小学校の3年生と6年生各2クラスの保護者合計124人にクラス担任を通じて質問紙を配付し、全員から回収できた。なお、この小学校では旧市街地と新興団地の両方を校区内にもっている。

Ⅲ. 結 果

A. 会員と対照群の間で有意差のあるもの

χ^2 検定を行なった結果5%の有意水準で差があるものは次の二点である。

1. 会員の家庭では、自然のことがよく話題になる。

(「よく話題になる」と答えた人；会員29.2%，対照群15.3%)

2. 会員の家庭では、ゴミの減量やリサイクルに努力をはらっている。

(「かなり努力している」と答えた人；会員34.8%，対照群12.9%) (図1)

B. 各項目間で相関の認められるもの

χ^2 検定では有意差は認められないが、相関があると考えられるものを以下に述べる。

1. 入会動機(質問8)と子どもの学年(質問9)

ここでの入会動機というのは、親が何を期待して入会させたかということであり、子どもの動機ではない。順位をつけて2を選んでもらった結果、第一の動機の1位は「自然に親しませたい」(51%)、2位は「心身を鍛えるため」(28%)であった。

親は遊び体験の多少に関係なく、自然に親しむ機会を子どもに与える場として「自然教室」を捉えている。

「自然に親しませたい」というのは各学年とも1位である。しかし、それ以外の動機について見てみると、子どもの学年によって差が認められる。小学校低学年では「心身…」や「人間関係…」という情操面の発育を期待する理由が多く、高学年になるほど「自然のことをよく知って欲しい」という動機がふえる(低学年20%，高学年25%，中学生30%)。

2. 入会動機(質問8)と現在住んでいる環境(質問3)

自然の多い環境に住んでいる人は、「自然のことをよく知って欲しい」という理由で入会し、自然の少ない環境に住んでいる人は、「自然に親しんで欲しい」という理由で入会している。(図2)

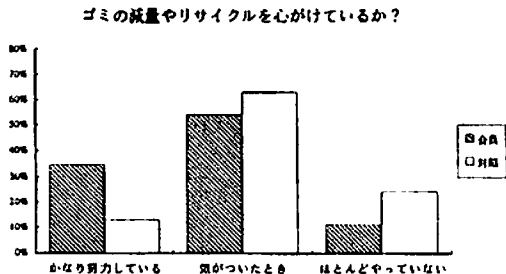


図 1

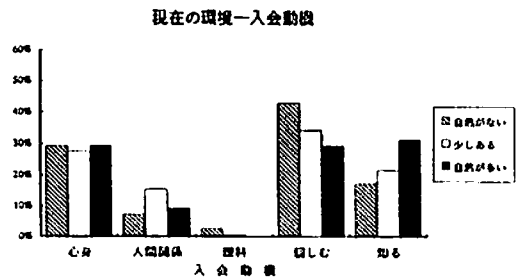


図 2

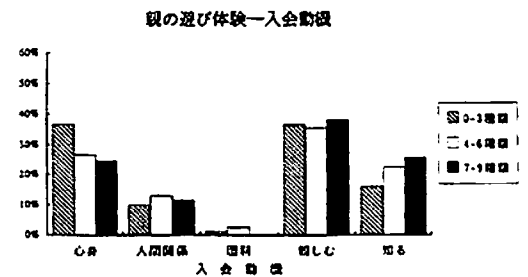


図 3

3. 入会動機（質問8）と親の遊び体験（質問5）

自然遊びの体験が多い親は、「子どもにも自然のことをよく知って欲しい」という動機で入会し、自然遊びの体験が少ない親は、「心身を鍛えたり豊かになって欲しい」という動機で入会している。（図3）

つまり、遊び体験の多少が入会動機の差となって現われている。

4. 親の遊び体験（質問5）と育った環境（質問4）

自然の多い環境で育った人は自然遊びの体験が多く、自然の少ない環境で育った人は自然遊びの体験が少ない。（図4）

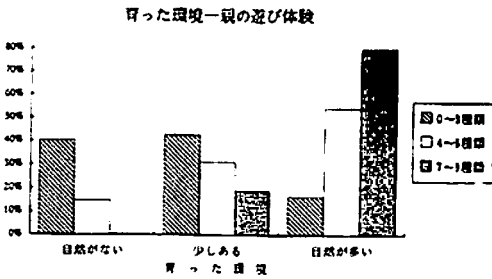


図 4

自然に親しむ活動—親の遊び体験

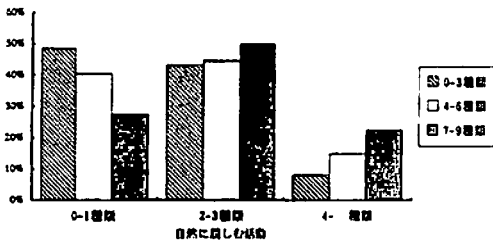


図 5

ただし、今回の調査では、自然遊びの体験を量的にとらえる質問項目はなく、体験した遊びの種類

5. 親の遊び体験（質問5）と自然に親しむ活動（質問14）

自然遊びの体験が多い親は、ハイキングや虫とりなど様々な活動を通じて、子どもと共に自然に親しもうとする。一方、自然遊びの体験が少ない親は自然に親しむ活動には消極的である。（図5）

6. 親の遊び体験（質問5）と環境保全の意識（質問7）

自然遊びの体験が多い人は環境保全にかなり努力している人が多く、自然遊びの体験が少ない人は環境保全に積極的でない人が多い。（図7）

環境保全の意識—親の遊び体験



図 6

C. 入会後の変化

7割の人が「変化があった」と答え、具体的には①自然の知識が豊富になった ②自然に親しむのが好きになった ③家庭で自然や環境に関する話題が増えた ④自然を大切にしようとする心や行動が芽生えてきた という回答が多かった。

IV. 分析と考察

会員の親が「自然教室」に子どもを入会させた動機は、子どもの学年、現在住んでいる環境、および親自身の自然遊び体験の豊富さによって異なる。このうち親の自然遊び体験の豊富さは、育った環境に強く支配され、自然の豊かな（農耕地も含む）ところで育った人は遊びを通して自然物との接触体験が多い。そして、体験の豊富な人は成人後も種々の活動を通じて、家族と共に自然に親しもうとする傾向がある。さらに、このような親に育てられた子どもは、おのずから自然体験が増

え環境にやさしい生活態度を身につける可能性が高くなると言えるだろう。したがって、生育過程で自然体験をしておくことは、成人後の自然環境の保全に対する行動に好影響を及ぼすばかりか、次代の育成にもつながることが期待でき、重要であるといえる。土田・小澤（1991）も環境保全にかかわる活動実践者らに対するアンケート調査で同様の結果を得ている。

一方、今回の対象者の世代およびそれ以上の年齢の人達の多くは、豊富な自然体験をもっているにもかかわらず、目先の経済性を追及するあまり自然環境の保全をないがしろにしている世代でもあることは事実である。

このことは、自然体験が環境保全意識を形成する上で重要な要因であるが、その後の環境保全についての啓発が不十分であれば破壊者にもなりうることを示している。したがって、自然体験の上に自然環境および環境保全についての的確な情報を受け取る機会や学習する場が必要である。そのような場として、家庭・学校・地域・行政あるいはマスコミなどがあることは言うまでもない。

V. 今後の研究・活動の方向

自然観察会活動は、自然破壊を少しでも食い止める一つの手段として、また、自然保護意識の啓発に有効だろうという考えで、全国各地で地道な実践を積み重ねられている。今回の調査の結果、子ども達に環境保全を啓発する場として自然体験を基盤とする自然観察会が一定の役割を果たしうることを間接的に知ることができた。

子どもの発達にとって自然との触れあいがどのような影響を及ぼしているかについての実証的研究は、国内はもとより欧米においても非常に少ないと言われている（黒坂，1989）。自然観察会が盛んになり、自然との触れあいが行政・民間団体ともに声高に叫ばれ様々な試みがなされている。ただ、その効果についての測定や研究が深められねばならない。

今後は筆者らが長年続けてきた自然観察会のありようが、参加者の自然観形成にどのような影響を及ぼしたかについて、追跡調査等を行なうこと

により効果的な環境教育の方法の確立を目指していきたい。

環境教育が広まっていく過程で、それぞれの自然観察会が蓄積してきたノウハウを互いに情報交換することによって精選し、それを必要としている野外活動団体や学校現場などに提供するシステムをつくっていく必要がある。

VI. 謝 辞

研究を進めるにあたり、有益な御指導と助言を頂きました兵庫教育大学教授 山田卓三先生、調査に協力して頂いた神戸市立妙法寺小学校 渡辺和俊先生に感謝致します。

VII. 引用文献

- 小川潔，1978. 自然観察会における環境教育の可能性，環境教育研究，1；42
 黒坂美和子，1989. 都市の自然をめぐる環境教育，緑の読本，spring；54-55
 黒坂美和子，1989. 子供の心の発達と身近な自然とのふれあい，国立公園，473；14
 土田貢司・小澤紀美子，1991. 河川環境保全における住民参加，日本環境教育学会第2会大会研究発表要旨集；120
 日本自然保護協会，1986. 自然保護教育活動推進事業における自然解説活動事例集報告書；7・12-13
 沼田真，1987. 環境教育のすすめ，東海大学出版会；179-180
 沼田真，1987. 都市の生態学，岩波新書；193-196

資料1. アンケート質問項目

A. あなた自身について

1. 性別
 - ① 男 ② 女
2. 年齢
 - ① 20代 ② 30代 ③ 40代
 - ④ 50代 ⑤ 60代
3. 現在あなたの家の近くに田畑あるいは自然の林はありますか？
 - ① まったくない ② 少しある ③ 多い
4. あなたが子供の頃、あなたの家の近くに田畑あるいは自然の林はありましたか？
 - ① まったくない ② 少しある ③ 多い
5. あなたが子供の頃、自然の中でしたことのある遊びはどれですか（複数可）
 - ① 虫とり ② 魚とり（つり）
 - ③ カエルとり ④ 貝ほり ⑤ 草花遊び
 - ⑥ 野草を食べる ⑦ ターザンごっこ
 - ⑧ だるまごっこ ⑨ 川や海で泳ぐ
 - ⑩ 経験がない
6. あなたの家庭では自然のことが話題になることがありますか？
 - ① よくある ② ときどきある
 - ③ ほとんどない
7. あなたはふだん家庭で、ゴミの減量やリサイクルを心がけていますか？
 - ① かなり努力している
 - ② 気がついたときにやっている
 - ③ あまりやっていない
8. 自然教室にお子さんを参加させておられる動機は何ですか？
 - ① 心身をきたえたり豊かにするため（自立心・情操など）
 - ② 人間関係を豊かにするため（同年令間・異年令間）
 - ③ 理科などの学習の役に立ちそうだから
 - ④ 自然に親しませるため
 - ⑤ 自然のことを知って欲しいから
 - ⑥ その他（具体的に）

B. 会員になっているお子さんについて

9. 会員になっている子供の学年
 - ① 小1 ② 小2 ③ 小3
 - ④ 小4 ⑤ 小5 ⑥ 小6
 - ⑦ 中1 ⑧ 中2 ⑨ 中3
10. 会員になってからの年数
 - ① 1年 ② 2年 ③ 3年
 - ④ 4年 ⑤ 5年 ⑥ 6年
 - ⑦ 7年 ⑧ 8年
11. 年間の例会出席回数はいくらですか？
 - ① 0～3回 ② 4～6回
 - ③ 7～9回 ④ 10～12回
12. 自然教室に参加するようになってから何か変化がありましたか？
 - ① ある ② ない
13. 「ある」と答えた方、それはどのような変化ですか。
 - ① 心身が丈夫になった
 - ② 人間関係が豊かになった
 - ③ 理科などの学習に役に立っている
 - ④ 自然に親しむのが好きになった
 - ⑤ 自然についての知識が豊富になった
 - ⑥ 自然や環境についての話題が以前より増えた
 - ⑦ 自然を大切にしようとする心や行動が芽生えてきた
 - ⑧ その他（具体的に）
14. つぎにあげた活動のうち、あなたのご家庭でこれまでに実施された経験のあるものを選んで下さい。
 - ① 散歩 ② 野草つみ
 - ③ 登山（ハイキング）
 - ④ 虫とり ⑤ 家庭菜園 ⑥ 自然観察
 - ⑦ 化石とり ⑧ 竹・木などの採集
 - ⑨ キノコ狩り ⑩ 飯盒炊さん